
厨二少年の異世界改革

籾田 詔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

厨二少年の異世界改革

【Nコード】

N1897V

【作者名】

籾田 詔

【あらすじ】

俺が補習の予定だった日。

少女が坂の上から猛スピードで降りてきた。
しかも彼女は異世界の魔王。

「あの…一緒に世界滅ぼしません？」

「はい？」

こんな感じで始まる俺と魔王さんの異世界改革記。
気に入らない世界はぶっ潰します。

第一話 激突

世の中には様々な人がいる。

運動の得意な者、運動の苦手な者。

裕福な者、貧乏な者。

万能な者、無能な者。

一人一人が個性を持つてこの世界に存在している。

だが、その多くの者は不当な扱いを受けている。

世界はいつだって不平等だ。

遙か昔に身に付いた、人間の「比較」という考え。

人間は古来より、自身より下等な存在を罵り、また批難してきた。

人間の、その醜悪な裏側の心は、まるでラジオ塔が電波を発信するかの如く、他人に伝播していく。

親から子に、恋人から恋人に。

上司から部下に、友から友へと。

時に形を変え、またある時は大きなものとなって伝わる。

それは今になってなお消えていない。

いや、人間という存在が在る限り、それは無くならないのかもしれない。

・・・とまあ、こういうことを言っている時点で俺は相当残念な人間になっているわけだが、こうして世界を皮肉っていないと、とてもじゃないが今はやっていられなかった。

なぜなら今日は補習の日なのである。

高校最初の学力考査で世界史12点という、ある意味で素晴らしい点数を獲得した俺は、土曜日だというのに補習だと言われ、学校に向かっていた。

一般世間の補習がどうなのかは知らないが、わざわざ土曜日にやる必要はないと思う。

平日の放課後でいいではないか。

早朝4時に電話（それも携帯に）しなくてもいいではないか。

・・・とまあ、こんな感じで不満ばかりが募り募って大変なわけだ。

発散しようにも出来ないところが我ながら実に情けない。

そんな感じで悲観的になっていると、急にポケットが震え始めた。当たり前だが、電話である。

発信者は、自分の担任。

出たくなかったが、出ないと絶対怒られるのでとりあえず出た。

「もしもし、何ですか先生？」

「おう、金森か」

今から補習の俺に対してなんとも言えない軽い調子の応答。

因みに、金森は俺の名字である。

申し遅れたが、俺の名前は金森浩汰。

以後よろしく。

「おう、金森かって・・・俺の携帯にかけといていちいち確認しないでください」

「おうおう。すまんすまん」

「……ったく……。で、何ですか？何か用件でも？」

「おうおう、そうだった。大事な話があったんだった」

「忘れてたんですか……。まあいいです。で、大事な話とは？」

「金森、今日補習なくなっただから」

「はい？」

「だから、補習なくなつたから」

「え、ちよ、ちよ、何？今日補習無いんですか？」

「うん」

「ええええええ！！！」

「大声出すな。耳に障る。ということじゃあな」

「え、ちよつ、先生！？えつ、ちよつ、ええ！？」

電話はそこで切れた。

俺は啞然とした。

担任曰く、今日は補習無し。

そして、今俺がいる位置は、学校まであと100メートルの地点（長い坂道）。

ぶつちやけて言おう。

理不尽過ぎんだろぅがぁぁぁぁ!!!!

・・・さて、近所迷惑な程叫んでしまったが、補習は無くなった。
通常営業。

「帰るか……」

天氣は快晴、
気分は曇天。

こういう時はゲームをして憂さ晴らししよう、そう思ってもと来た道に戻ろうとした時だった。

「止まってええええええええ！！！」

上の方から声。

しかも、女の子の悲鳴だ。

振り返ってみると、自転車で猛スピードで降りてくる人影が。

ブレーキが壊れているのか、止まる気配はなく、むしろさらに加速して降りてくる。

…あれ？こつち来てね？

あれ？もしかして、当たるんじゃない？

いや、当たるよ！

絶対当たるよ！

そうこう焦っているうちにも、自転車は猛スピードで降りてくる。
当たるのは時間の問題だった。

「ど、どけてええええ！！！！！」

…無理じゃあああ！！！！！

あ、あ、あ、当たる！

あ、やばい、来た！

あ、あ、あ、あ…

ゴスッ！！！！！

予想通り、俺は自転車と激突した。

全身に強い衝撃を受ける。

俺は宙を舞った。

人間、身体が危険になると全てがスローモーションに見えるらしい。

現に俺は全てがスローモーションに見えていた。

落下が遅く感じる。

思考も単純化されて、もう自分のことしか考えられない。

このあと地面に叩きつけられても、死ぬことは無いだろうが、全身の骨は持っていけるだろう。

ただ、それもまだ分からない。

もしかしたら、奇跡的に無傷かもしれない。

でも、一つだけ分かることがある。

今日はゲームは出来なさそうだということだ。

第一話 激突（後書き）

初投稿です。

一話目で核心まで迫らないのが私流（笑）
読みにくかった方すみませんでした。

第二話 再会

目が覚めた。

いや、気がついたと言った方がいいかもしれない。

俺はあの時、猛スピードで降りてきた自転車と激突し、坂の上から落ち、地面に叩きつけられた。

その衝撃でどうやら気絶していたらしい。

まあ、あんなところから落ちて地面に叩きつけられれば、大抵の人は気絶するだろうが。

「ここはどこだ…？」

俺が目を覚ましたそこは、激突現場の坂ではなく、ベッドの上だった。

ベッドの上と言っても、自分のものではない。

見知らぬ家のベッドだった。

どうやら、どこぞの親切な御方がご丁寧な俺を運んでくれたらしい。事実、枕元には今日使う予定だった、筆記用具やら教科書やらが入った鞆が置いてあった。

体を起こす。

不思議と体が軽い。

よく見ると何故か俺の体には傷がなかった。

あの高さから落ちて地面に叩きつけられれば、擦り傷は勿論、骨の一つや二つは持っていけるだろう。

下手すればオタブツだ。

なのに擦り傷一つ無いとはどういう事だろう。奇跡と思いたいが、まずそれは無いだろう。

「何でだ・・・？何で無傷なんだ・・・？」

俺が頭を抱えていると、

「あ、やっと気が付いたんですね」

部屋の向かいから声が聞こえた。

ガチャと音が聞こえ、ドアが開く。

中に人が入ってきた。

「あ・・・」

入ってきたのは先程の自転車で俺に降りてきた少女だった。

「まだ安静にしてなくちゃダメですよ？傷が開くかもしれないんですから」

「・・・あ、ああ」

驚きで声が出なかった。

「さつきはごめんなさい・・・止まらなくて・・・」
謝られた。

彼女は心底申し訳なさそうに下を向いた。

「あ、いや、別にいいよ。気にしてないから」

「ほんとですか？」

彼女は顔を上げた。

「・・・あ、ああ。ほんと全然気にしてないから」

俺がそういうと、彼女は安堵したのか、力が抜けたように座り込んだ。
だ。

「良かった・・・体で償えと言われたらどうしようかと思いました・・・」

「いやいやいや、まてまてい！誰がそんなこと言うか！どんな変態だよ！」

「そうなんですか？」

「そつだよ！普通は言わないよそんなこと！」

「おかしいですね・・・」

「おかしくないよ！誰だよそんなこと言ったの！」

15年生きてきたなかで一番強くつつこんだと思う。

なんというか…まあぶっ飛びすぎだった。

さっきまでのシリアス風味の空気はどこにもない。

「・・・という冗談はさておき」

「冗談なのかい！」

「一つ、お願いがあります！」

「スルーしたな！スルーしたよな！・・・でお願いってなんだ？」

「あの…私と一緒に世界を滅ぼしませんか？」

「・・・はい？」

「私と一緒に世界を変えてみませんか？」

「・・・どゆこと？」

「私、異世界で魔王やってるんです」

「・・・え？」

朝、俺に激突してきた、名前もまだ聞いていない自転車少女は、異世界の魔王でした。

この先どうなるのやら。

第二話 再会（後書き）

今回も、変なところで終わってしまいましたが、仕様です。
出来としては、あまりよくないので、もしかしたら、少し編集する
かもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1897v/>

厨二少年の異世界改革

2011年10月9日04時48分発行